

日記・家集と物語のかかわり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 蜷川, 恭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4671

日記・家集と物語のかかわり

蜷 川 恭 子

(一) 柏木の人物造型と紫式部日記の関連性

柏木は、太政大臣家の嫡男として立派な貴公子であるにもかかわらず、女三の宮への執心から常軌を逸する行動が物語で語られる。柏木の異常な行動から、柏木という人物が、第二部に入って急遽、変貌したかのように思われ、「密通事件とそれ以前において完全に分裂した人物である」というような指摘もある。しかし、第二部における主題の変化によって、柏木の言動が変わっても、やはり、柏木その人であるように描かれていると思うのである。一人の人間も視点を変えれば、その人物の異なる面があらわれてくる。柏木の場合も本質的な人格が変わってしまったり、もしくは「完全に分裂した人物」になってしまったわけではないだろう。人間というものは、さまざまな環境の変化で、今までに見られなかった一面が顔を出すことがある。そのような人間理解が、紫式部の中にあつたのではないかと思う。紫式部の人間理解、人間観を日記の中から考察し、柏

木の人物造型にどのような影響があつたのか見ていきたい。

①また、今やうの君達といふもの、たふるるかたにて、あるかぎりみなまめ人なり。齋院などやうのところにて、月をも見、花をもめづる、ひたぶるの艶なることは、おのづからもとめ、花ひてもいふらむ。朝夕たち混じり、ゆかしげなきわたりに、ただごとをも聞き寄せ打ちいひ、もしは、をかしきことをもいひかけられて、いらへ恥なからずすべき人なむ、よに難くなりたるをぞ、人々はいひはべるめる。みづからえ見はべらぬことなれば、え知らずかし。(一九八頁)

ここで、紫式部は、「今やうの君達」の二面性について語っている。齋院方は風流で奥ゆかしく、紫式部が仕えている中宮方は地味で趣がないという評判が殿上人たちの間にあるらしい。「今やうの君達」も中宮方に来ている時は、その地味な様子に合わせて実直に

振舞っているが、齋院方のような趣のあるところへ行けば、風流な振舞をするというふうに言っている。「今やうの君達」は、その時々で自分が身を置く環境にあわせて、自分自身を柔軟に変化させているわけである。「今やうの君達」には、中宮方で見せる一面と、齋院方で見せる一面が存在することを明確にしている。これは、人物を多面的に見つめる紫式部の鋭い洞察力のあらわれであると思う。

普通、紫式部が目にする「今やうの君達」の姿は、中宮御所にて律儀に振舞う「みなまめ人」の様子であるはずだ。しかし、紫式部は、齋院方にいる時の「今やうの君達」の姿にまで考えを巡らせている。この日記の一節で、環境の変化とともに変わっていく人間の在り方に触れながら、人間の二面性についての感慨を述べている。人間を一面的には見ない、紫式部の洞察力がよくあらわれていると言えるだろう。

紫式部という人は、環境に順応しやすいく「今やうの君達」とは正反対の人物だと言えるだろう。華麗な宮廷生活になかなか馴染めずに憂いを深めているのである。器用に環境に順応することができない自分を日記の中で嘆いている。

② 行幸近くなりぬとて、殿のうちを、いよいよつくりみがかせたまふ。よにおもしろき菊の根を、たづねつつ掘りてまゐる。色々うつろいたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老も退ぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことの少しもなのめな

る身ならましかば、すきずきしくもてなしわかやぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを、見聞につけても、ただ思ひかけたらし心の、ひくかたのみつよくて、もの憂く、思はずに、嘆かきことのまさるぞ、いと、苦しき。(二五一頁)

行幸を目前に控えて、豪華に美しく磨きたてられていく土御門邸の様子が記されている。しかし、その華やかな雰囲気には紫式部は溶け込むことができない。華麗なる宮廷生活と自身の精神の矛盾に悩む姿が見られる。土御門邸の立派な様子を見聞きするにつけても、「思ひかけたりし心」、出家遁世を願う気持ちに惹かれていく自分がある。仏の世界に強く惹かれる自身の心と自分が存在する世界、環境との関係に思い悩み、「いと、苦しき」状態なのである。

このように、宮仕え生活と自己との間に大きな溝を持つ紫式部であるが、一方で次のような感慨も日記に記している。

③ ただ、えさらずうち語らひ、すこしも心とめて思ふ、こまやかにものをいひかよふさしあたりておのづからむつび語らふ人ばかりを、すこしもなつかしく思ふぞものはかなきや。大納言の君の、夜々は、御前にいと近う臥したまひつつ、物語したまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。(二七一頁)

④ 師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞか

し。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやとおぼゆ。(一八四頁)

③は、紫式部が実家に帰って、宮仕えの友を懐かしく思っている場面である。宮廷生活を物憂いものと感じながらも、いつの間にか同僚の女房を慕わしく思っている自分の心の変化に気づいて、「ものはかなきや」と嘆いている。「世にしたがひぬる心か」とあるように、気付かないうちに宮仕えの日常に慣らされ、境遇に流されていく自分の心に愕然としている。

④は、臨時祭の後、里下がりしていた紫式部が、内裏に帰参した日のことである。新参の頃を思い起こすにつけても、本来煩わしく思っているはずの宮仕えに、いつのまにか慣れてしまっている自分を「うとましの身のほどや」と思い、厭わしく感じている。

②のように、宮廷生活と自己の乖離は、紫式部の物思いの種であり、うまく環境に馴染めずにいる。しかし、③、④でわかるように、知らぬ間にその環境に慣らされることもわかる。紫式部は、そうした自分を「うとましの身のほどや」と思い、自分が特に願ったことでもないのに環境に慣れ、自分が変わっていることをうれしいこととは思っていない。自分の心が環境に順応していくことに戸惑い、嫌悪感さえ抱いているように思える。簡単に自分を曲げ、周囲の環境に馴染んで変わっていく自分の心に戸惑い、何とか、自分らしさを堅持したいと考えているのではないだろうか。環境に押し流

されたくないと願う思いが、次の例から読み取れる。

⑤われらを、かれがやうにて出でるよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし、かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、いまより後のおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむやすしかしと、身の有様の夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼれば、目とまることも例のなかりけり。(一八〇頁)

⑥かういと埋もれ木を折り入れたる心ばせにて、かの院にまじらひはべらば、そこに知らぬをとこに出であひ、ものいふとも、人の奥なき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがしておのづからなまめきならひはべりなむをや。(一九五頁)

⑦かく、かたがたにつけて、ひとふしの、思ひ出でらるべきことなくて、過ぐしはべりぬる人の、ことに行末のたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかたがたにはべらねど、心すごうもてなす身ぞと思ひはべらじ。(二〇二頁)

⑤は、童女御覧の日、多くの男の人にまじって見られている童女の気持ち pensando、紫式部は気の毒に思えて仕方がない。しかし、宮仕えに慣れるにつれて、自分もどんなに変わるかと思うと、そら

恐ろしく思え、眼前の儀式には目もとまらない。ここにおいて、紫式部は「目にもみすみすあさましきものは人の心」といって、人の心の脆さをはっきりと認識しているようである。

⑥は、「かういと埋もれ木を折り入れたる心ばせ」と言い、気の利かない無骨な性格だと自分のことを言っている。齋院方は、「ただいとをかしう、よしよしうはおはすべかめる所」（一九四頁）、「もてっけ、おのづからしかこのむ所」（一九五頁）と言われ、風雅な生活を送っていると記されている。そのような齋院方に身を置けば、自然と優雅な気持ちになり、風流な振る舞いにも慣れていくと紫式部は考えているようである。

⑦は、自分の過去を回想しての言葉である。夫を亡くして将来の頼みもない身である紫式部が、どんなに心細くても寂しさのあまり、心ずさんで自暴自棄な振舞をする身にはなるまいと言っている。

ここにあげた例から、紫式部は、人というものは、その時々自身を取り巻く状況に左右されるものだとする考えを強く持っているように思う。人の心の脆さを自分自身の宮仕えの日々から感得しているためではないだろうか。そうした思いの中から人物を多角的に見つめる紫式部の人間理解が生まれてきたのではないかと思うのである。

紫式部は、日記の当初から、華麗な宮廷生活に馴染めぬ心を語っている。しかし、知らないうちに、自分もまた、こうした宮廷生活に慣れてしまっていることに気付く。③、④からは、変わりゆく自分の心を認識し、自分の心が変わったことに戸惑い、不満を持って

いたことがわかる。周りの環境に流され、自分の意思とは関係なく、知らぬ間に変化していく心を不思議なものと思っているようである。紫式部の中には、人間の変化は、その時々々に自分を取り巻いている環境に大きく影響されるものであるという認識がはっきりと存在していると思う。宮廷生活の中で、自分自身の体験や他者を観察することによって、人の心の脆弱さを感じ取ったのではないだろうか。

環境や自分の置かれる状況の変化によって、人間はその性格を大きく変えてしまうことがあると認識し、紫式部は、そうした心の変動に並々ならぬ関心を抱いているように思う。こうした人間理解から、紫式部は、一人の人物を一面的に見るのではなく、あらゆる角度から人物を観察する洞察力を身につけたのではないかと考えるのである。

このような紫式部の人間理解をふまえて、柏木という人物を考えよう。

女三の宮を垣間見たことを契機に、若菜上巻の終わり近くから、柏木の人物像に唐突感を禁じえない付着的造型がなされていると、森一郎氏は問題にされ、柏木の変貌と指摘されている。柏木は、「いと静まりたる人なり」（胡蝶一七一頁）、「右の中將は、ましてすこししづまりて、心恥づかしき気まさりたり」（常夏二二〇頁）というように光源氏から評され、物語が第二部の世界に入っても、朱雀院から「いたくしづまり思ひあがれる気色には抜けて」（若菜上三六頁）と気位の高い人物であるが、「いたくしづまり」とあり、やはり「静まりたる」人物であるという認識に変わりはない。しか

し、その後、女三の宮の垣間見を契機に柏木は、女三の宮事件をめぐって、常軌を逸した情熱の虜となってしまう。それを指して、森氏は、「柏木の異常な人物造型は、女三の宮との密通事件という新たな局面、新たな主題のために、にわかにもその異常さを付着せしめられたもの」と述べているのである。柏木の変貌は、一人の統一した人間としての変化を超えたものであり、密通事件をめぐる柏木とそれ以前の柏木とは、完全に異なる人格であると説かれる。

確かに、柏木の女三の宮に対する異常な情熱とそれに伴う一連の行動は、物語の構想や主題の変化も関係するものと思われるが、紫式部は人間というものを多面的に観察し、理解しようとしてきた人であり、日記で語られるように人間の心の脆さを身をもって感得した人物である点に注目したい。作者としては、「密通事件をめぐる柏木とそれ以前の柏木とは、完全に異なる人格」と考えていたのではなく、女三の宮を異常なまでに思慕する柏木もまた、柏木という人が持ちあわせていた一面であると捉えていたのではないだろうか。

柏木と女三の宮の密通を知った光源氏が、自身と藤壺との密通を思い起こし、父桐壺院の心中への付度から、過ちを犯した若い二人を糾弾できない心境を次のように述べている。

いと心づきなけれど、また気色に出だすべきことにもあらずな
ど思し乱るるにつけて、「故院の上も、かく、御心には知らし
めしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ。思へば、その世の

事こそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」と、近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。(若菜下二四五頁)

柏木と女三の宮の密通は過ちであり、光源氏を大いに苦しめるものであったが、自分の過去の罪を思うと、この恋を必ずしも指弾できないのである。どれほど不条理な恋の有り様であったとしても、人に恋する感情を非難することはできないという気持ちである。傍線部は、

いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人まどふらむ(古今六帖 一九八〇) が引かれていると考えられている。恋に人は「まどふ」ものであり、それが恋をした人間であるだろう。この場面と同じような内容として、謹厳実直な髭黒大將が玉鬘に対して、熱烈な懸想文を書いた場面がある。

右大將の、いとまめやかにことごとしきさましたる人の、恋の山には孔子の倒れまねびつべき気色に愁へてたるも、さる方にをかしと(胡蝶一六八頁)

「恋の山には孔子の倒れ」は、孔子ほどの聖人でも時には倒れ、失敗するということを意味する諺らしい。その諺を使って、「恋の山には孔子も倒れ」と言い、髭黒大將を孔子に準えて、懸想文の書ぶりが熱心なのをひやかしているのである。恋においては、どん

な立派な人間であっても、常軌を逸し、失敗することがあるという意に用いたものと考えられる。恋という感情は、どのような理性的な人物であったとしても、心を乱し、過失を起こしうるものであるという認識を持ち、人の心は取り巻く環境や出来事に左右されやすい不安定なものであるという作者の意識がはっきりとあらわれているように思う。政治社会や自分の置かれた立場から逸した柏木の行動であっても、それは、柏木の恋による姿であり、「恋の山には孔子の倒れまねびつべき」ものなのである。こうした作者の人間理解がベースになって、柏木の後半生は造型されたという側面があると考えられる。

人物を多面的に見つめて理解するという、人間理解の方法は、源氏物語の人物描写などにも見え隠れするように思う。柏木においても、太政大臣家の嫡男として振舞っている一面と、女三の宮への恋に異常に執着する一面が共存していると考えられる。故に、一人の人物として、全く異なった人物像があらわれたわけではないと思うのである。

(二) 柏木の人物造型と紫式部集の関連性

紫式部は、境遇や環境と人間の心の関係について、強い関心を持っていたようである。環境に応じて変化していく人の心を、興味深く観察し、日記の中で何度も記している。そして、華やかな宮廷生活に馴染めず、宮仕えを憂鬱なものに感じている自分自身でさへ、知

らぬ間に心が変化していることに愕然としている。紫式部は歌集でも、そうした人の心について触れている。

身を思はずなりと嘆くことの、やうやうなめに、ひたぶ
のさまなるを思ひける

数ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

心だにいかなる身にかかならむ思ひ知れども思ひ知られず
(二二六頁)

右にあげた二首が、紫式部集の中に収められているわけだが、心というものの仕組みについて、強い興味を抱いていたことがわかる歌だと思ふ。日記においても、環境に流されていく心の有り様を取り上げていたが、ここでも「身」と「心」の関係構造について触れており、紫式部の中で「身」と「心」の関係構造を考えることが、自身の課題となっているようにさえ思われる。

「身を思はずなり」の詞書によってはじまるこの二首は、連作である。「数ならぬ」歌は、人数でもない自分のような者の「心」に「身」を任せることはできないが、境遇の変化に同じ、「身」に付き従っていくのはその「心」であることよ、という意である。「身にしたがふは心なりけり」とあるように、環境、境遇に流されてしまふ「心」の変化をはっきりと認識している。「身」にどうしても付

き従ってしまう「心」に対して、諦めの気持ちがあらわれているように思う。一方、「心だに」歌の方は、私のような者の「心」でさえ、どのような「身」になっても満足することはないものだとかわかってはいるのだが、なかなかそれを諦めきれないものだ、という意になる。

こうしてみると、この二首の意図する内容は、連作にもかかわらず、スムーズに展開しているとは言えない。この二首の間では、お互いを通してすっきりと内容の筋が通らないのである。「数ならぬ」歌の方は、「身」と「心」の関係について「身にしたがふは心なりけり」と言い、心の変化を嘆いている。しかし、「心だに」歌では、己の「心」を捨て去ってしまうことはできないと言っている。「思ひ知れども思ひ知られず」と、わかっているけれども諦めきれないのだというじれったい気持ちの高ぶりが感じられる。「数ならぬ」歌では、諦めにも似た心境ではあるものの、境遇に付き従う心の変化を仕方のないこととして受け入れているが、「心だに」歌では、己の「心」は捨てることはできないと訴えている。このように歌の内容からすると、紫式部の中で「身」と「心」の関係構造がすっきりと整理できているとは思えない。また、この二首の詞書に、「やうやうなのめに、ひたぶるのさまなる」とあり、紫式部の気持ちが静まったり、昂揚したりして、決して彼女の精神が安定した状態でないことがうかがえる。それだけに、連作としてこの二首が歌集に並ぶことで、彼女の内面に鬱積した悩みの深さ、そして「身」と「心」の関係にひたすら思いを馳せる、その思考の濃密さを感じ取る。

られるのである。

日記の中でも見られたことだが、紫式部は自身の心を何とか堅持したいと考えているようである。日記では、知らぬ間に物憂いと思っていたはずの宮仕えに馴染んでしまった自分の変化を「こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどや」（一八四頁）と嘆いていた。環境に応じて変化することを避けたい心の在り方を認識しているものの、紫式部自身はあくまでも、己の理想を求め続け、簡単に境遇に流されたくはないと思っているのだろう。また、「心だに」歌に見られるような自身の心を捨てきれないという思いも、日記の中で記されている。

かく世の人ごとのうへを思ひ思ひ、はてにとぢめはれば、身を思ひすてぬ心の、さても深うはべるべきかな。（二二二頁）

これは、日記における消息部分のはじめに当たるのだが、わが身を思いきれない「心」が、こんなにも深くあるものなのかという心情を明かしている。紫式部にとって、「身」と「心」に関する問題は解決しようとしても解決できない問題であったようだ。

前の二首は、紫式部の出仕前の詠歌であると言われている。宮仕え以前から、紫式部は「身」と「心」の関係構造について関心を持ち、自身の心の変化に対する認識も持っていたことになる。出仕前の歌を取り上げたが、歌集には初めて宮仕えに出た頃の歌もある。

初めて内裏わたりを見るにも、ものあはれなれば

身の憂さは心のうちに慕ひきていま九重ぞ思ひ乱るる（一四八頁）

宮仕えの第一印象を詠んだとも言えるこの歌は、わが「身」の嘆きは、「心」の中についできて、今宮中においてもあれこれと幾重にも乱れることだ、という意になる。前の二首と詠歌の時期に違いはあるが、「身」と「心」の乖離する状況においては一貫するものがある。歌集や日記から、紫式部の「身」と「心」の乖離に関する認識は、宮仕え以前から存在したが、宮仕え生活を経験するうちに、さらに鮮明になり、深化していったと考えられる。

このように紫式部の中で、「身」と「心」の関係構造が深刻な問題となっており、彼女の内面において常に他者や自身の「心」について、機会あるごとに考えていることがわかるのである。

日記には、その冒頭部分に、紫式部が自身の心の変化を認識し、内省する部分が見られる。

憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかり
けれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らる
るも、かつはあやし。（一三三頁）

宮仕えに出でから、中宮彰子の立派な様子に感心し、日頃の物憂い気分も忘れ去っている自分の変わり様に気付き、心というものの

移ろいやすさを感じているのである。紫式部は自分の心の変化を内省し、いぶかっている。そうした気持ちは、「かつはあやし」という言葉にあらわれている。すばらしいものにひかれてゆく自分自身の心を、客観的に凝視する第三者のような視点が紫式部の中に存在し、「あやし」と評しているのである。こうした視点は、紫式部の特性と言ふべきものであると思われる。そして、このような物の見方が、物語作者としての彼女を作り上げていったと考えるのである。人物の内面における二面性を凝視する姿勢は、源氏物語の中にも見られる。

姫宮も、「いかにしつることぞ。もしおろかなる心ものしたまはば」と胸つぶれて心苦しければ、すべて、うちあはぬ人々のさかしら、憎しと思す。さまざま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし。（総角二四七頁）

これは、薫に迫られた大君が頑なに拒み、逃げ出した翌朝のこと。大君は薫が立腹して帰ったのを内心、心配していたので、薫から自分宛に手紙が来たことをうれしく思っている。そうした自分の心境を、昨晚は逃げ出したくせに、今はうれしと感じているとは、我ながら矛盾した心であると感じているのである。その気持ちは「かつはあやし」にこめられている。この「かつはあやし」は、大君の心に寄り添った表現であると考えられる。物語の作者は、大君に、

その矛盾した心の動きを内省させる。こうした大君の揺れ動く心を読者にも明確に認識させ、人物の中に潜む二面性を描こうとする作者の意図が感じられるところである。大君の内面にある二面性を読者である我々に確実に理解させたいとする作者の意図が、「かつはあやし」というように語り手と人物が一体化した表現を取らせたように思う。

その他にも、この大君の内省と同じような場面がある。

いと心苦しく、我さへ恥づかしき心地して、薫「世の中はともかくても、ひとつさまにて過ぐすこと難くなむはべるを、いかなる事をも御覧じ知らぬ御心どもには、ひとへに恨めしなど思すこともあらむを、強ひて思しのどめよ。うしろめたくは、よにあらじ、となん思ひはべる」など、人の御上をさへあつかふも、かつはあやしくおぼゆ。(総角一九七頁)

ここには、匂宮が中君のもとから遠のいてしまったと嘆く大君を慰める薫の様子が描かれている。薫は大君を得たいという自分自身の願ひすら叶わないのに、匂宮のことまで面倒を見ている自分を「かつはあやしくおぼゆ」として、お人よしなことだと自嘲ぎみに思っているのである。薫の心の二面性を、やはり薫自身にも気付かせ、「かつはあやしくおぼゆ」というように、語り手と薫が密着した形で表現している。

前の例と同じように、薫の内面を薫自身にも分析させた例をもう

一つあげる。

「いでや、本意にもあらず。さまざまにいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過ぐしつづ年経ぬるを、今さらに聖よのもの、世に還り出でん心地すべきこと」と思ふも、かつはあやしや。(宿木三六九頁)

女二の宮との縁組の話で、薫がその縁組に耳をかさず、現世離脱の生き方を身上としてしていることに触れ、常人とは異なる思念であることが認識される。「かつはあやしや」は、薫自身の気持ちでもあり、語り手の判断でもあるだろう。しかし、この場合は、間投助詞の「や」を下接していることで、薫とびったり一体化してしまっているのではなく、語り手がその立場を残しながら、薫の気持ちをすくい上げる形になっている。縁談にも耳をかさない、一種の現世離脱を身上とする薫の常人とは異なる心の在り方について、薫自身も客観的に認識しているわけである。

このように、自分の心の変化について、自分自身で認識する第三者的な視点を作中人物にも持たせている。これは、人の心の脆さを宮仕え生活などを通して、実感している紫式部の人間理解があらわれている所以ではないだろうか。

女三の宮への異常な執心から常軌を逸していく柏木は、一見すると物事を深く考えたり、多面的に見ようとする姿勢は見受けられない。自分の女三の宮に対する思いにのみ従順に、ひたすら彼女への

恋に生きた人生であったと言っても過言ではないのである。しかし、そんな柏木にあっても、僅かではあるが、自分自身でその心を内省し、分析する場面がある。

①宮も、「げに、をかきさきましたりけり。心なむ、まだなつきがたきは、見馴れぬ人を知るにやあらむ。ここのなる猫ども、ことに劣らずかし」とのたまへば、柏木「これは、さるわかまへ心も、をさをさはべらぬものなれど、その中にも心かしこきは、おのづから魂はべらむかし」など聞こえて、柏木「まさるどもさぶらふめるを、これはしばし暁はり預からむ」と申したまふ。心の中に、あながちにをこがましくおぼゆ。(若菜下一四九頁)

②さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心も、いとつらくおぼゆ。(若菜下一四八頁)

①は、東宮から女三の宮の唐猫を預かるため、奔走する自分自身に対する反省心であり、柏木の心が強く反映した表現であると言える。夢中になって、唐猫を得るために東宮を説得している柏木だが、自分の異常さにも気付いているのである。

②は、女三の宮との恋が、自分の人生を破壊に導くようなことにならぬのではないかと懸念していたのに、それが現実のこととなってしまったという柏木の反省である。これも、やはり柏木の思いに密

着した表現であり、懸念していたにもかかわらず、女三の宮との恋に突き進んでいった自身の心を恨む気持ちが出ている。「さして重き罪には当たるべきならねど」と思いつつも、一方ではこれまでの女三の宮に対する恋を後悔しているわけである。

柏木は女三の宮を垣間見て以来、彼女への恋に一心不乱に突き進み、我々読者にも、その異常性のみが印象として強く残ってしまう。しかし、右にあげた二例のように、柏木にも自分自身の心を第三者的な視点で観察し、客観的に反省したりする一面があるのである。

このように、一つの視点のみで、人物の心を表現するのではなく、様々な角度からその気持ちを観察するのが、この物語の作者の思考パターンであるように思う。日記や歌集からも、自分や他者の心の変化を敏感に感じ取り、人の心の脆さを強く認識している姿がうかがえた。作中世界の人物に関しても、「かつは」というような表現等で、その人物の内面における二面性を明確にしているのである。違った視点から人物の心の有り様を観察し、その内面に潜んでいる二面性に、言及している点に、「身」と「心」の関係構造を考え尽くしてきた作者紫式部の影響が感じられる。

(三) まとめ

柏木のように、自分の心の赴くままに生きたような人物であっても、作者は彼の内面における複雑な様相を描き出すことを忘れなかった。柏木が若菜巻以降、急激に人格が変わってしまい、それ以前と

比べて全く異なる人格になってしまったという指摘もある。しかし、柏木にも自分自身で内面を凝視させ、決して単一的な人物にしてしまふことはなかったのである。柏木も、女三の宮への執心から引き起こされる異常な行為を内省することで、人間としての悩み深さが付与され、虚構的な人物像から人間らしさが生まれたように思う。

若菜巻以降の柏木像は、新たな主題のために、それ以前とは全く異なる性質を付け加えて造型されたものではないと考える。環境や境遇に翻弄される人間の様子を紫式部は、宮仕え生活などを経験するうちに感得していった。柏木像には、そうした人間理解がふまえられていると考えられる。人間の心の脆弱さをしっかりと認識している紫式部であるからこそ、若菜巻以降、女三の宮をめぐる常軌を逸していく柏木を造型することができたのではないだろうか。柏木像からは、人間の弱さを知り、その弱い部分に目を背けない紫式部の鋭い洞察力が窺える。

紫式部は、日記や家集の中で、人の心の脆さを嘆き、環境や境遇に翻弄されてしまう心の在り方について思い悩んでいる。人間の弱さを認識し、日々の生活の中で自分や他人の心の動きに鋭い観察の目を向けており、このような紫式部の観察眼は、物語を多面的に見て、人物の中に潜む二面性を描き出そうとする物語の作者としての姿勢に繋がりが、作中人物にも自分の心を内省し、分析する第三者的な視点を持たせている。一つの視点のみで人物の心を表現するのではなく、様々な角度からその心を観察するのが、この物語の作者の思考パターンであると考える。

*源氏物語本文の引用は、『日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）による。

*紫式部日記本文の引用は、『新編日本古典文学全集 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』（小学館）による。

*紫式部集の引用は、『新潮日本古典集成 紫式部日記 紫式部集』（新潮社）による。

（注）

（1）森一郎氏「源氏物語における人物造型の方法と主題との関係」
（『国語国文』昭和四十四年四月）

